

矢作川流域圏懇談会「第3回山部会WG」（恵那市）開催報告

1. 実施概要

(1) 実施概要

○実施日時：平成24年6月16日(土)
10:00～16:30

○開催場所：

【集合】奥矢作レクリエーションセンター

【訪問箇所】松下薪材間伐作業現場、道の駅ラフォーレ（えなの森林づくり間伐モデル林）、奥矢作木センター（NPO法人福寿の里）、奥矢作レクリエーションセンター

【WG会場】庄屋の家(古民家再生第4弾)】

○参加者：24名（事務局含む）

(2) 内容

【プログラム】

1. 現地見学

(1) 松下薪材間伐作業現場

(2) えなの森林づくり間伐モデル林

(3) NPO法人福寿の里

(4) 奥矢作レクリエーションセンター

2. 山部会WG

(1) NPO法人「東濃森づくりの会」串原支部の取り組み

(2) 上矢作・串原・明智の林業

(3) NPO法人「奥矢作森林塾」の取り組み



集合写真



会議風景

2. 主な会議内容

第3回地域部会WGでは、恵那市の森づくりに関わる現状について、現地見学をした上で、取り組み事例の紹介や山村再生や今後の森づくりに関する意見交換を行った。WGで話し合われた内容は以下のとおりである。

- 森林組合と民間企業の立場から話題提供があり、森林組合・民間企業・地域の関わり方や本当の森づくり等を中心に話し合いが行われた。業界として林業が生き残り、広範囲の森林を健全に保つためには、オーダーメイドの計画づくりや、民間参入、森林組合と民間企業間に競争原理、森林技術者の技術交流などが必要であるとの意見が出された。
- 次回の第4回WGは、7月7日に豊田市で開催することを確認し、集合場所、時間、会場の手配、お弁当の持参の有無について、後日メールで告知する。
- この集まりを第4回WGの準備部会ともし、WGの構成・内容について話し合った。その結果、第4回WGは2部構成とし、森づくりとして森林行政と森林組合の取り組みについて豊田市が担当する。担い手づくりについて、州崎氏が担当し、民間から発している様々な取り組みを紹介する。
- 今後、このメンバーのメーリングリストを作って、情報交換できるとよい。

3. 現地見学会概要

(1) 松下薪材間伐作業現場

松下薪材の松下氏より間伐施工中の森林についてお話を伺った。



松下薪材間伐作業現場

- この山は補助金の関係でやっているもので、今年4月から全部で20haくらいやった。架線が3段集材といって集材機を使っている。(松下)
- 強度のやり方で、間伐率は65%程度である。間伐率が20~30%だと、間伐を実施したときはよいが、成長の早い木はすぐ成長し、すぐ暗い山になり、下草が生えない山になる。(松下)
- 来年再来年になると、雑木が生えて立派な山に戻ると思う。そうすると水の確保もできし、山が荒れない状態になると思う。(松下)

意見交換（ ・ ご意見、提案 ▶ 回答 ）

- ・ 山主は何人くらいいるか。(丹羽)
 - ▶ 山主は6人いる。奥に切捨て間伐をやった場所があり、そこにも6~7人いる。(松下)
- ・ 1000 m³程度出たそうですね。(丹羽)
 - ▶ 20haの施行範囲のうち半分程度を実施して、発生木は1000 m³程度である。(松下)
 - ▶ 目通りで一番太いもので60cm程度の立派な木もあって、材積はかなり出た。(松下)
- ・ 切る木と残す木はどうやって決めるのか。
 - ▶ 間伐する際には、将来性のない木を一番先に切り、山主に還元しなければいけないので、その次に市場に持って行って金になる木を切る。(松下)
- ・ 松下さんのところは、たくさん抜いてあるがよい木が残してある。成長の遅い木ばかりが残ると山が荒れるが、そういうことがない。(大島)
- ・ 道の駅前の森林も、私が選木した場所であるが、4年ほどたって、徐々に暗くなっているのがわかると思う。木の成長に合わせて間伐していけばいいと思っている。(松下)
- ・ 道の駅前の木を切ったときの評判はどうか。(丹羽)
 - ▶ 森林組合に来て、ああいう山作りをしてほしいという要望があったそうだ。(松下)
- ・ 木材の値が安いので、補助金がないかということでやらせてもらっている。
- ・ 丸太の市場に出すと、m³あたりの単価はいくらになるか。
 - ▶ 単価は、スギが1万円/m³ちょっとで、ヒノキが2万円/m³いかないくらいで、平均すると1万5千円/m³いかないくらいである。(松下)
- ・ Ha 当たりいくらくらい返せるか。
 - ▶ 10万円/haくらいである。全体の1割2分程度である。(松下)
- ・ 補助金がないと赤字になるか。
 - ▶ 赤字になる。(松下)

(2) えなの森林づくり間伐モデル林

恵南森林組合の大島氏より、えなの森林づくり間伐モデル林（道の駅ラフォーレ前の森林）について、お話を伺った。

- 所有者は、岩村山林組合という団体で、ここ一体で約 100ha ある。
- 当時は暗い山で下草も生えていない状態で、地元の方々からの要望もあり、平成 19 年～20 年に実施した。
- 見え場については、山主の了解を得て、間伐率は 50～70%程度である。
- 堀井工務店が作業道を約 1600m 入れており、施工計画は森林組合でやり、施行は森林組合の直営班、OB 班、松下薪材の 3 グループで分けて施行した。
- 木材の量は、初年度 7.3ha で 1300 m³搬出した。翌年は、5～6ha で 700～800 m³搬出した。
- 最初は、正直切り過ぎと思ったが、植生がここまで回復するとは思わなかった。
- ここは少し特別で、全部がこのような施行をやっているわけではない。
- 奥の方の森林は、30～35%の間伐率になっているところもある

意見交換（ ・ ご意見、提案 ▶ 回答 ）

- ・ この集材は架線ではなくて、機械か。
 - ▶ 作業道と架線を組み合わせで搬出している。（大島）
- ・ ヒノキだから、樹高はそんなに高くないか。
 - ▶ もう一本林道があり、スギの林分が樹高もかなり伸びている。（大島）
- ・ 最近土砂が流出したが、間伐したところは荒れておらず、未作業のところは土砂が流出した。（大島）



えなの森林づくり間伐モデル林

(3) 奥矢作木センター NPO 法人福寿の里

恵南森林組合の大島氏より、NPO 法人福寿の里について概要を伺った。

- もともと松下薪材さんが、事務所兼木工品販売をやっていた。木工品が売れなくて、しばらく放置されていた。
- 今は、NPO 法人福寿の里自然クラブが、上矢作町の有志で設立された。
- 上矢作の自然が残っているので、そこへトレッキングツアーやモンゴル村の下草刈り等



奥矢作木センター

を実施している。ツアーは開催すると人気があっというまになる。

- 松下薪材は、発生した木材は、薪にするなど材を無駄にしないようにがんばっている。
- 道の駅で売っている物も松下薪材が加工したもので、少なからず収入源となっている。
- ここにも、定住促進事業の恵那市のふる里協力隊が一人いる。

(4) 奥矢作レクリエーションセンターの竈

NPO 法人奥矢作森林塾の大島氏より、レクリエーションセンター前の竈について説明を伺った。



奥矢作レクリエーションセンターの竈

- 矢作ダムに流入する流木が 500~600 m³ということで、年間 600 m³の流木を炭化している。夏の 2 ヶ月間は、暑いこととセンターの利用が多いことから休みとし、月 60 m³を計画的に実施している。
- 煙を地下に引き込み、木酢と煙に分けている。木酢はディーゼル燃料に使用される。
- 中央の竈は、3 m³を炭化できる。これも煙を地下に引き込み、木酢と煙に分けている。
- 右の小さな竈はステンレス製ドラム缶で、子どもたちや名古屋大学の学生が使用している。
- ここで作った床下調湿炭と土壌改良材を、湿度の高い三河湾や浜名湖周辺へ出荷している。新築の家一軒に対して、600 袋程度入れる。
- 東北大学の研修で、大震災の瓦礫をうまく炭化できないかと実験している。どんな形で進めるかは、これからの研究でやっている。

意見交換 (・ ご意見、提案 ▶ 回答)

- ・ 表面を焦がしてある木は、何ですか。(須崎)
 - ▶ 東京大学の杉浦銀二先生が新月の日に伐採したもので、表面を焼く、あるいは、焼かない方が、いろんなものに使うときに長持ちするなどを研究している。(大島)
- ・ 何のためのものか。(須崎)
 - ▶ 何のためのものであるかはわからない。新月の夜に木を切るなどしている。(大島)

(5) 庄屋の家

各自お弁当を食べながら、NPO法人奥矢作森林塾の大島氏から庄屋の家の話を伺った。

- 1505 年にはじまった家であり、串原の第 1 号の庄屋の家である。岩村城の武士が検分に来たときなどに滞在したもので、岩村城の紋の入ったお膳が蔵にあった。
- 2 代養子が続いており、今の家主は、千葉県に在住であるが、生まれ育った場所であり、年に 3~4 回は帰ってくるが、その子は、一度来たことはあるが、家には全く関心がなかった。
- 由緒ある家なので、文化財として残そうと、農林水産省の移住定住の事業の支援を受けて、リフォーム塾といって、一泊二日のリフォーム技術の講習会などを実施している。昨年、一昨年で合わせて 20 名程度が受講している。

- 秋山さんが東北の震災を期にこちらに住むようになり、横井さん夫婦は門に住んで、ここの周辺の整備をしていただいている。
- 今、ようやく家の左半分をきれいにし、皆に使ってもらえるようになった。
- 建物自体は 200 年もので、3 間分の鴨居は、現在の建築基準法では建てられない。

4. 山部会WG概要

蔵地先生より、山部会における本日の意見交換の位置づけ、2 順目以降の WG の流れについて確認があった。

(1) NPO 法人「東濃森づくりの会」串原支部の取り組み

恵南森林組合の大島氏、小林氏、串原林業の三宅氏より、上矢作・串原・明智の林業についてお話を伺った。

- なぜ、NPO を立ち上げたかということだが、元々、うちは森林組合で、行政との繋がりもあるなかで活動をしているが、民間事業者等を林業に参入をしたいという話はあるが、なかなかハードルが高いということで、ちょうど 3 年前に林業再生基金がスタートした時に、岐阜県でふるさと雇用という事業をやられて、それに恵南森林組合として手を上げた。特に今年からの制度、森林経営計画といった事に取り組もうとした場合、民間では限界がある。管理部門として、NPO を立ち上げたと言うのが経緯である。林業の経営コンサルタントとして、経営計画を作るだとか、いろんな法律相談、教育、いろんなことを、目指している。串原林業の三宅大輔くんのところ、串原で第 1 号の計画を支援交付金も取って、取り組んでいく事をスタートしたところである。課題は、NPO として、運転資金も何もない状況だ。各事業体に、月 5 万円を払っていただいているが、なかなか厳しいという話も出ている。(大島(徳))
- 2 ヶ月程前、4 月 2 日設立の申請をした会員数は恵南森林組合と提供している 3 社、合計 4 社の 19 名が、会員となって活動を始めかけたところである。全部で 4 つの本所支所を構えた。大きなきっかけは、平成 21 年 12 月に政府の方から公表された森林林業再生プラン、これの大きな柱が、国産材の受給率 27% を、50% 以上にするといったことになっている。具体的な進め方としては、各エリア一定規模の各エリア、50ha 以上の各エリアを集約し、最短 5 年間の森林整備の計画を策定する。市を始めとした行政機関の方に認定していただき、計画に沿った作業に対してのみ、補助金を交付するといったような内容になっている。大きく岐阜県東濃地区を対象として、地域ごとの山の構想を作った上で、地域と密着した形で、加速度的に整備を進めていきたいことで、集まったメンバーで設立した。2 つの部門に分かれており、集約化された所有者の方々に対し、アドバイス、計画策定する部門と、森林技術者によらず統一的なものが仕上がるようなレベルアップを目指す部門である。我々林業会同じ業者のみんなが、人並みに飯を食っていくことができるよう目指して行こうといったことで、活動しようとしている。現在のところ、今まで 30 回近くの月 2 回の定例会を開いて、補助金の勉強会であるとか、地区の説明会の資料の作成を進めている。均一化された山の仕上がり、品質を求めるべく、一つのモデル的な団地を設定し、選木から搬出の方法まで、全ての検証を行っているところだ。全く実績のない中だが、串原林業の代表の三宅大輔くんが串原のささゆりの湯の温泉の周

辺一帯約 40ha を年内には計画の策定をしようということで、先月から始め出したところである。(小林)

- 山は個人個人のものであって、お互いの干渉のないものであった。このままでは山は荒れる一方で、森林をもう一度復活させたいという思いでやっている。民間事業者でも、直接補助金をもらってやっていけるようになり、それに向けて動き始めている。本当の森林づくりをしていかなければならないと思っている。計画を立てることになった山の山主に計画について話をしに行くが、だいたい 70 歳くらいで、昔、自ら植林するなど山に手を入れていた方々である。皆さん山が好きで、自分はもう山に入れないので、後はなんとか山を頼むという印象であった。串原の山は、整備されていないが道から入りやすく、原生林ではなく全て里山のようなものである。山から木を一度切り出して終わりではなく、何の問題解決にもならない。(三宅)



意見交換（ ・ ご意見、提案 ▶ 回答 ）

- ・ 山づくりは串原林業でも、恵南森林でも出来るのに、新しい組織を作る意味は何か。(丹羽)
 - ▶ 民間事業者は、木を切ったり現場の仕事は出来るが、書類の申請、森林簿の貸与、図面は見れない。市長に承諾をもらい、県に申請して、ようやく森林簿が見れる。民間が個人的に行っても、全然成果がないので、森林組合では、ノウハウがあるので、グループを作って情報も技術も共有できれば、向上できるということで始めた。(三宅)
- ・ 小林さんに逆に聞くとするなら、技術もノウハウも大きな森林組合にはあり、本来メリットはない。メリットはないが、やろうとしていることについて教えて欲しい。(丹羽)
- 同じ業界の人間として、同じ条件、状態にするのが、一番大きな目的である。東濃管内には、森林組合が多数存在するが、組合の半ば独占状態である。組合が所有者の情報、或いは、国や行政からの情報を独占状態で開示され、補助金を取るために形骸化した計画を立てて、本来の山づくりと程遠いような事を、かなりの年数続けてきたはず。それを、民間事業者の皆さんにお願いするときに、組合が仕事を作るのだが、かなりの手数料を取り、そして受け渡し等をお願いする。かなり劣悪な作業環境の中で、本当の精一杯の中でやっていただくという状態で、しわ寄せが来ている。そういった状況を、完全に打破して、やる気と意欲があるものが、自由に参入して競争原理を働かせて、加速度的に整備を進めて行こうというところが本音である。(小林)
- 民主党の政策転換で、木材生産をどんどん増やし、民間の事業者の参入を、どんどんやりたいという方針は作った。実態として、現場でどういうふうに運用されているかというと、集約化とか団地化という所有者をまとめるような作業は、例えば森林簿や、地図とかそういう図面がなければ出来ない。土地に誰が所有しているか分からないわけだ。それは個人情報で、民間事業者の人が、例えば参入したいからといって、その個人情報にアクセスできるかっていうと、民間の人は見せてもらえない。運用が実態としてされている。森林組合だけが、それを見る事が出来るようになっていた。そうすると、民間

事業体としては、いくら国がそれをやるといっても、そもそも所有者も分からないという状態で、参入のしようがないわけである。問題が全国で一時期起きていたということである。森林組合としては、それで独占状態になるわけだが、森林組合としては民間を排除したいなら、そのまま放っておけばいいという、それが一つの選択肢である。今のお話しは、それでは駄目だと、独占状態だと競争原理が働かないと。そういう民間と森林組合との間の、何か不平等さみたいなものは、基本的にとっ払って、平等な環境で対等な立場で競争した方が、最終的にはお互いがレベルアップして行くと同時に、森林の手入れ森づくりという点でも、どんどん広い面積をカバー出来ていくかと、民間事業体がどんどん廃業していくような状態が絶対プラスにならないではないかという発想だと私は解釈したのだけれど。そんな理解でいいか？（蔵治）

- ▶ それも一つ。うちは恵南森林組合なので、恵南の情報を持っている。大輔くんの所は、恵南なのでエリアはいいが、それ以外の市町村の民間事業体、うちの管内に5つ、6つの森林組合があるが、ある所は全然そういうことをやらないで、ちょっとごめんなさい。（大島(徳)）
- ▶ 森林組合によって、どういうスタンスをとるか、それは様々なのだろうと思う。（蔵治）
- ▶ 全く壁を作って、本当によそ者扱的な人間が多い。（小林）
- 森林組合が形骸化しているということ、どの辺が形骸化したのか？（原田）
 - ▶ 今年の4月から、森林経営計画制度というものに変わったが、それまでは森林施行計画というもので、組合が半ば全ての方から、組合に計画を立てることを任せるといった契約を交わした上で、きちんとした山づくりの構想に基づいて計画を作るのではなく、鉛筆なめなめで計画をたてたものである。その計画がなければ、補助金がもらえないので、とにかく補助金をもらうべく、形骸化した計画を立てて、経営を成り立たせている。（小林）
- 森林事業再生プランの中の一番大事な柱が、山が持っている特性を含めて、将来的なあるべき山の姿をきちっと計画的に作る、要は、責任ある仕事の価値ある山を作ること等々のところが、3割いけば補助金出るという話は、それでいいのという気がするという事か。（原田）
 - ▶ おっしゃる通り4、5年ぐらい前までは、今の作業の位置づけというのは、理解していなかった。とにかく補助金をもらうためにといったような思いだった。今は、こういう山にしたいという将来的な構想を持った上で、所有者の方含めて、全員で共有した上で、進めるべきだと考えている。（小林）
- 森林林業再生プランについて、森林組合自身でやるというスタンスはないのか？（原田）
 - ▶ NPOを独立させたそこへうちの頭脳集団も全部行っている。だから、うちはNPOから、将来的には仕事をもらうという形になる。民間事業体もそこで計画立てて仕事をもらうという形になろうかと思う。3年を目途に考えているが、そんなにうまくいくのかと。（大島(徳)）
- 大島専務は、どちらかというと、懐疑的な立場か？（蔵治）
 - ▶ それはある。（大島(徳)）
- 今のNPOの位置づけだが、NPOで全体の森林経営計画なるものを作ってしまって、そ

れを実行部隊として森林組合を含めて、各社の皆さんでやろうという、その時に共通認識を持ってやろうという、概念でいいか？（今村）

➤ そうだ。地域によっても違うので、串原の僕が計画立てるところであれば、僕が全部責任持って、所有者の人からも山を長期に渡って、僕が管理していく。それぞれに、そういう人が居る必要がある。（三宅）

・ 山を見させていただいての印象なのだが、すごく強度の間伐で、割といっぺんにパンっとそこまで持っていかうとしているのかなという印象を持った。そういうふうと考えてらっしゃるのか？（今村）

➤ 僕の今度立てる計画のところだと、山の要素が大体2種類に分かれて、一つは、いずれ間伐して材木として出す生産林と、もう一つは、民家の裏山や串原の観光エリアの温泉など、見える環境保全林、環境としての山の2つに分かれる。補助金をもらって、環境林に関しては、ある程度が20年、30年後までくらいの林形を創造してやっていかないと。今後利益が還元されるという山ではないことになる。今回の補助金を使った整備で、例えば50%、60%それ以上の間伐をして広葉樹を植えるというように、ここは生産林じゃないという終止符を打たなければいけない山も結構あると思う。（三宅）

・ NPOの収入は支援交付金だけを予定しているのか？（?）

➤ 今のところ、その予定である。ゆくゆくは、その計画を立てる主体になって、交付金をもらいつつ、施行の時も補助金が出る窓口になり。（小林）

・ 施行そのものの補助金は、現場に行ってしまうので、本当に計画づくりで当てられるところは、交付金だけということか。今は、交付金のha当たりの単価はいいが、これが将来、何処まで続くかということは、大変不透明だと思う（?）。

➤ 平成28年まではあると聞いている。そこから先に、具体的な構想は、今のところない。（小林）

➤ 僕みたいな経理計画を立てて管理していく人間が、本当のゾーニングをしないとイケないと思う。（三宅）

➤ イメージとして所有者の管理を彼に任せると言っているような、管理イメージ、計画を立てるってことは、管理権を実質委託したというイメージで、多分おっしゃっているのだと。（蔵治）

➤ 長期、住宅契約に近いね。（丹羽）

➤ それぐらいの、信頼関係を彼ら所有者さんと築きつつあるという説明だと思う。（蔵治）

○ 本来ゾーニングは、市町村がやるものだが、県の言い分であるが、最近とにかく急いでゾーニングしろという。岐阜県は、森林環境税が創設されたが、水源林にゾーニングしたところには、環境税を使わせてやると。じっくりゾーニングは時間をかけてやるべきものだとは思っている。（大島(徳)）

・ 志はものすごく身体の震える思いをするが、他の森林組合は、囲い込んだままであるが。（丹羽）

➤ 施行計画で、囲い込んでいる。（大島(徳)）

・ その志みたいなものを、東濃全体に広めようという感覚か。NPOのミッションで、東濃

という名前が付いていることは、そういうことか。(丹羽)

- ▶ 森林組合は、エリアが決められていて、そこから外へ出る手法でもあると思う。(大島(徳))
- ▶ 恵南は派手な事をしているみたいなことを言われる。(小林)
- ・ 今のNPOがやろうとしている事は、計画の立案主体は、森林組合が契約を作って、実際の作業を民間さんにも、お願いしていくやり方でも出来るような気もするのだが、敢えてそれをNPOにしたっていうのは、どういうことなのかという確認だが。(?)
 - ▶ 僕が、今回交付金を受けて、森林計画を立てられるようにしてくれたのも、森林組合の方針である。それはお互い思っていたものだと思う。森林組合の人が串原に来て、今までやっていたのだけれど、俺が串原に住んで、地域の人と山だけの事ではなく、いろいろな作業をやったり、田んぼをやったりしているので、串原みたいな、山と所有者の感じの場所だったら、絶対おらみたいなのやつが、管理していった方が普通に考えていいもので、そういうこともあって、民間事業体を横並びにしてくれたと思う。(三宅)
- ・ 恵南森林組合が各地域の事を非常に良く知った上で計画づくりをするかということ、必ずしもそれはできない。一番地元で良く知っている人が、計画づくりをした方が良いと。それを統括するのがNPOということなのかな。森林組合の串原支所じゃなくて、NPOの中で串原支所を作って、ここが計画づくりをやっていくということではないか。
 - ▶ そうである。(三宅)
- ・ 基準の3割とか、楽といえば楽ですよ。森の個性に対応した計画になると思う。そういうことがすごく難しいと思うが、どういうふうに、クリアしていこうという方向性なのか。(須崎)
 - ▶ 僕としては、今までやりたかった事が出来るし、山にあった施行は1番に考えて行きたい。(三宅)
- ・ 実際に山を見てきた中で、これがいいだろうと、これまでの経験から培ったものを反映させていくということか？(須崎)
 - ▶ そうである。所有者の考えがある山もあるので、所有者と話して、今後どういうふうな、この先の計画を立てていかないと思う。(三宅)
- ・ 一箇所、一箇所オーダーメイドの山づくりになるっていう、そういう形か。(須崎)
 - ▶ そうである。(三宅)
- ・ 今までは、既製品というか、レディメイドだ。(須崎)
 - ▶ 森林経営計画を立てる中で、オーダーメイドで立てていくことが、まさにふさわしい。個別に見ていく。それで補助金の率が変わるのではなく、全体として交付金がもらえるようになるから、それが個別に出来るようになったということである。(原田)
 - ▶ 今までだと間伐して施行して、そのままだったのだが、例えば、今度、養豚場があると言ったが、そこに例えば養豚所の山林放牧とって、林内放牧というふうに活用していくかまで、僕らが提案していくということを考えなければいけない。(三宅)
- ・ 今までの、規制のやり方の森づくりの枠を越えた感じにしたということ。(須崎)
 - ▶ このNPOの形っていうと、東濃という枠で見ると、平谷から根羽、豊田、岡崎くら

いは、同じ事は考えられるわけですよ。そこら辺は逆にどうか。(丹羽)

- 今の根羽は、村内だけの事業体で考えているので、素材生産会社の方が2社あり、現実的にはすみ分けをされていた。今年度から、森林経営計画の概念が出てきたので、今年から一緒にやりましょうと声を掛けている。単純に単管請負計画を考えており、業者さんの方も泣かないように、妥協点を作って、一緒にやってくださいと。業者さんにしてみれば、今までは自分たちのやるエリアを決めて、個々に動いていたのが、森林組合と結ぶ事によって、継続的に早く、しっかり生産効率を上げるとすれば、どんどん仕事が待っている。そういった感じで、加速度的に森林整備を進めていきたいと考えている。今、技能職員と毎月1回、2時間ぐらいかけて、業界として林業が生き残るためにはどうか、もう少し工夫次第で、私たちの表現では、里山資源の潜在能力を引き出せというのはしているのだが、アイデアでもっと出していけないかと、やりつつある。NPO矢作川源流の森根羽というのがある。長野県田中知事が、既得権持っている森林組合が山のそういう事業だけを独占するのはまずかろうという事で、溶かしてしまうという言い方をした。うちら溶かされると困るもので、NPOを作って、それで仕事を受けてやっちゃえばいいということでNPOを作った。そのNPOは、木育活動とかいろいろやって、農業なんかもやった。色んなアイデアとか考えなどもトライ出来ればいいのかと、そんな展開には若干今なっている。(今村)
- 田中知事は、先進的な事をやっていた訳だね。それを国が、今度やり始めたってということ。そういうNPOが、東濃という枠で立ち上がれば、矢作川の下流の人達も、支援しようという力も生まれる可能性もあると思う。私も、三宅さんから相談を受けていて、是非一緒にやらせて下さいと言っているが、そういう事も将来ありうるのかなという夢のある話だ。そうしたら矢作川流域の繋がりでも、一大頭脳集団みたいなのができて。(蔵治)
- 山で作業している衆は作業している衆、みんな山好きなのにもっと仲良く話しているいろいろな情報交換している。もうちょっと矢作川というのがあるのであれば、そういう枠を越えてやれば、スムーズに事がいろいろ進むと思う。(三宅)
- 皆、そういうふうに願って、この流域圏懇談会始めたので、まさにそれが私らがここに集まっている目的でもある。(蔵治)
- 確かに、今日、根羽と恵南と豊田が森林組合の関係者が集まっている。(原田)
- そんなこと、今まであまりなかった。国交省さんが、これを始めなければ実現しなかったこと、岡崎も来て頂いてれば、もっと凄かったのだが。(蔵治)
- みんな、それぞれが取り組んでいるっていうことを、それぞれが知る事が大事だなと思う。(原田)
- この恵南と、今お話しになった根羽で、今までの森林組合の枠組みを越えた実際に地域づくりとかに踏み込むような活動になっているのだと、聞いて思った。(須崎)
- 今まだ放射能で全然こちらの方は、汚染されていないから、さっき言ったオリジナルのようなものを作りながら関東圏で5千万人いるから、市場はこちらじゃなくて関東の方に市場を持っていくっていうような、アイデアも一つかな。あと、もう一つ言いたかったのは、自然の森という森は、どういう森なのかなあと。串原の森を本当の自然の森に、

動物がいたりとか、森の食べ物が食べられるような。そういう森に再生していてもらいたいなあと思う。(医療)

- 分かりました。ありがとうございます。(三宅)

(2) 上矢作・串原・明智の林業

- 恵那市は、林業関係の職員が課長を含めて4人しかいない。市長ほか、市としての考えは森づくり一生懸命な考えは持っているけれども、実際には出来ないというのが実態である。私有林も2千haから3千haあるので、管理も含めて、うちが中心になって提案して、森づくり委員会等を通して、市に働きかけている。恵南森林組合の概要だが、



岐阜県で3番目の広域合併組合で旧恵南町村で、岩村、山岡町、明智町、伏原村、上矢作町の5つの町村の組合が合併してできた。東濃ヒノキが、ブランドで、古くからヒノキの生産が盛んな地域である。植林されている人工林の、7割から8割はヒノキ、残りがスギである。4,790haが国有林、民有林が22,000haと、その内の約61%の13,000haくらいが人工林である。林齢構成を見ると、8から11齢級であるが、手入れがされていない山が大半で、生産林として利用できる場所と、そうでない場所がある。森林技術者が現在は52名で、職員も現場技術者も横並びの組織である。全員を月給制で、出来高制という形を採用している。ある程度専門にやらせた方が効率がいいという事を想定して、重機グループ、バットグループなど高度な技術がいる所へは、このメンバーが行って、指導をしながら進める。木材搬出に関しては、数年前まで、ほとんど架線系での搬出をやっていた。ここら辺の土質等から考えると道も作るが架線もやる、本当に銘木の様な物、それから国有林事業ではヘリコプターも使うということで、オールマイティを目指そうということでやっている。事業年度実績は、16年は4千数百万、17年は3千万の赤字を出して、18年に、わずかな利益を出した。事業量は、16年当初と比べると段々増やしてきた。23年度はあまりにも材が安いので、春先から一時期木材生産を止めたりして、23年は落ちている。木材を使うということ、皆さんに意識してもらいたいという思いで、可愛い「ちっちゃな椅子」を作った。木工体験に来て頂くと自分で作ることができる。(大島(徳))

- ・ 17年度から18年度というのは売上げで赤字を出して建て直すのが大変だったと思うが、どんなことをやって復活できたのか教えて欲しい。(今村)
- 多いときには6億円の売上げがあったが、それが16年に3億円まで落ちているが、人数がその分減っているかというと殆ど減っていない。赤字になるわけである。恵那市の場合には16年に5ヶ町村を含めて合併した。その前あたりは旧町村が合併することがわかっている、事業をあまり出さないこともあって売上げが落ちた、17年からはとにかく何でも引き合いのあった仕事は絶対断らないでやろうという方針でやった。とにかく仕事を断らないで、向こうがいくらでやって欲しいというものにできるだけ対応するように取り組んだ。公共事業にいつまで頼っていてもダメだということで、このあたりから

積極的に民有林の集約化。山主さんがやるやらないに関わらず、一帯を全部森林調査と測量をやるとうこととまとめて、測量が終わった時点で地域の座談会を開いて、やったことがある。雇用促進住宅という所の草刈りと併せてドブ掃除をやってくれという依頼があって、それも森林技術者には頼めないで、事務所の連中で行って、こなしたこともあった。(大島(徳))

- ・ 事業管理費の中で内人件費というのがぐーっと減ってきているが、何か離れ技があるのか。(?)
 - 事務所経費も、ある程度現場に出る。例えば測量調査に事務職員がいけば、そっちの方に日報があがるので、管理人件費は減っていく。ふるさと雇用だとか緑の雇用もそうだが、指導者の人件費も見られるようになっているので、そういった所の事業の方に入ってしまう。補助金の美味しそうな物は全部飛びついている。(大島(徳))
- ・ この地域は地籍調査が全部完了していたのか。(?)
 - いいえ、5ヶ町村ある中で山岡町と岩村町はほぼ終わっている。串原もほとんど終わっている。明智町も半分強、上矢作町は山林はゼロ。(大島(徳))
- ・ 16年、17年の職員作業員数と今の数との合計数は違うのか。(林)
 - そんなには変わっていない。ばらつきはあるが、常用の人数で45名から54名の間を動いている。この16年当時47、8人だったと思う。(大島(徳))
- ・ 3千万、4千万の赤字を18年、19年でクリアした、公共事業も極端に増えたわけではないと思うし、そのへんのからくりがよく理解できない。(林)
 - どうしてこんなに18年改善したかということは、総収益は伸びたわりにして費用が掛かっていない。職員の給料は全部下げたし、いろいろな手当、全部一時ストップした。一番の強みは私も、統括課長も現場上がりで、現場がどういうことをやっていたかは良く知っている。空人工といって今日はやる気がないのでパチンコに行こうということとを私自身がやっていた。(大島(徳))
- ・ 専務が事務所に入って、統括課長も入って、とにかく意識改革をしると、仕事というのはこういうものではないということ、言われた。事業量倍増を目指せということを目指に、最初は本当に渋々だったが、一年間は本当に死にもものぐるいで、仕事ってこういうことなのかということを感じながら勤めました。その結果がポンと出てきて、それが技術者含めて大きなきっかけになって、一体感を持ちながら18年からはものになった。(小林)

(3) NPO法人「奥矢作森林塾」の取り組み

- 職員は現在5名体制で県外から来てくれた人が我々とともに串原を考えてくれている。平成12年9月12日の恵南豪雨災害では、35,000立米の木材がたまった。この木材が下流に流れていったらと考えると、日本一の自動車の町豊田市は、危ない状態であったのではないかと。私たちのやっている仕事、森林再生と水質保全、公園整備などもやっています。間伐材の太鼓引きをいただき、それでベンチや机をつくり、各公園に順にセットしている。流木炭を利用した水質保全活動で、布団籠に流木炭を入れて、小さい河川に入れている。小学生とタイアップしてホテルと同時にカワニナの養殖をしている。今度の24日の日曜日にホテル祭をやる。リフォームづくりで、空き家が地域の資源と捉え

て何とか再生していこうという形で現在も進めている。第4弾が、お屋敷「結の炭家」ということになる。150年くらい経った家をまず改修して、町から来ていただいた方に田舎暮らしを楽しんでいただこうということで、リフォームした。地元の大工さんが講師をやっていた。第2弾のリフォームは、今度はリフォームばかりでなく、田舎暮らしのいろはを学ぼうということで行った。今年は、今日来ている大輔君にお願いして、3回チェーンソーの講習会をしようということで、安全にチェーンソーを使っていただくことを計画している。第3弾で、このときは土木で使うオートレベルでまず家のレベルの確認している。すべて中を全部取ってまた一から組み上げていく形でやっている。こことお屋敷を含めて、去年1泊2日10回講座をやって、総勢328名ほどの方が来ていただいた。串原最初の庄屋さんの家だということもあり、何とか文化財として残していこうと、新建材を全部取って200年300年前の家に戻そうという形でやっている。里山体験イベントを月1回くらいで開催している。里山ボランティアということで、毎月第2日曜日は里山でボランティアをする。都市農村の男女交流会、これも不定期であるがやっている。里山ボランティアについては、近所のU字溝が壊れていけば直しにいき、石垣の補修をしたり、矢作ダムのサクラがだいぶ古くなり、毎年だいたい300本から500本の植え替えをしている。毎月第2日曜日はボランティアでやる。「縁会」という名前で、男女ふれあい交流で山へ来ていただいている。4月から10月まで毎週水曜日、ボランティアでバスを運転している。これを踏まえて、串原の地域協議会に持ち込み、向こうの車をリースして、地域協議会がやってくれた。そのデータを取り、我々自体でダイヤを組んで買物バスに走らせるということで、現在恵那市の自主運行バスが走っている。地元の方にやっていただいて中山太鼓保存会の方たちと一緒にしてお祭を持続していると同時に、串原は中学校になると必須科目で太鼓をやる。小学校が歌舞伎、中学校が中山太鼓である。今後の課題は、我々がもっとPRしていかななくてはだめではないかということである。一昨年で、この地域20名くらいの方が入ってきていただいたが、もっと大勢の方が入ってきて、一緒になってこの地域のことを考えていきたい。生活をしていくには現金収入も必要でそれが、一番今、我々がどういうバックアップをしたらいいのか、何とかこの地域で起業していただける方と呼んでいきたいというのが今後の課題である。マスコミもいろんな取材をしてくれて、志望者がどんどん増えてきている状態である。

(大島(光))

- ありがとうございます。非常に幅広く、しかも的確に必要なことをやってらっしゃる。何かご質問はあるか。(蔵治)
- ・ 一番気になるのは、リフォーム塾のお金、材料などどこから出ているのか。(原田)
 - 今やらせていただいているのは、農水省さんの移住定住事業というのがあり、その関係でソフト面だけお金が出る。ハード事業は一切出ない。ハード面については我々が全部お金を出している。例えば、先ほどのお買いになった家を直す場合は、材料はお買いになった施主さんが出している。私も1銭もお金をもらえないので、年金生活を送っている。(大島(光))
- ・ NPOの会計としては、結構厳しいということ？(蔵治)
 - 厳しい。5名の中でふるさと活力推進室があり、そこで2名の職員がやっている。ふ

るさと活性化協力隊というのが、今日は上の「結の炭家」で朴葉の風車を作ったり、小、中学生とやっているのので2名行っているが、本当にうちの職員というのは、彼女一人である。彼女が、事務局で全部書類をつくったり、報告書をつくったり毎日やってくれている。あと2人は、レクリエーションセンターで、5名で今やっている。(大島(光))

- ・ 先ほどのダイヤも自分らでデータを調べて、提案していかれたのと同じように、リフォームの前段階があって、この串原の空き家もすべて調べてきちんとしたデータの上で動いている。その話を少し話して欲しい。(丹羽)
- 私たちは2年かかって串原と上矢作の空き家を 159 軒当時あったが、全部調べた。自治会へ行って、まず写真を撮ることに了解をもらい、全員に、その家をどうするかアンケートを取ったが、非常に時間がかかった。個人情報ということで教えてもらえず、本当に苦労してあちこち皆さんに聞いて辿り着いた。どうされるかとアンケートを取り、すべて同じ一覧表をつくり、そのデータを元にして始めた。今では逆に、更地にしてその家をだめにするよりは、たとえ 100 万でもいただいて家を出した方が得になるという計算を基に、うちの家も使ってくださいということがやっと出てきた。一番難しいのが、相続登記ができていない家がかなりある。相続権がある方に全員委任状をいただき、その委任状を持ち込んで法務局でやることになる。今月中には一軒契約がなされて、リフォーム塾に入っていけるのではないかと思う。我々の事業がこの地域の方にも認められてきたかなということである。彼女らも今どんどんやってくれるが、お年寄りの所へ夜話に行ったりして、お年寄りも本当に自分の孫娘が来たような気持ちで非常に喜ばれている。配食サービスも一緒になってやってくれている。串原に入った人は串原の人ということで、地域協議会、住民会議に全員入っている。最終的にはマイクロ発電機を使って、30 アンペアくらい発電し、街路灯とか地域の公民館であるという所には電気を供給しようと考えている。皆さんの中で、田舎暮らしがしたいという友達でも知りあいでもいたら、是非ご紹介していただければ大変有り難い。(大島(光))
- ありがとうございます。(蔵治)

【第4回WG について】

- 最後に、次回のことをお話したい。7月7日の土曜日で、担当が豊田地区になっている。今日は中心メンバーの森林組合及び豊田市森林課の課長さんもいるので、この場を借りて、どんな考えで計画されているかということと、それをよりよいものにしていくようなご意見があればいただければと思う。(蔵治)
- 正直いって細かいことは決めていない。豊田市で森林整備の方で団地化を中心にやっていることと、機械制御をやっていることを中心に紹介したらどうかと思っているところである。一度、蔵治先生や国交省とご相談して決めたいと思っている。人づくりのところは、次回にしようかと思って、今回は山の方を中心にやろうかと思っている。(原田)
- 今、話していただいたように、先ほどこちらの方でNPOを立ち上げられたという話を聞きながら、大変参考になった。うちの方はうちの方のやり方でやっているの、その辺の話をしながらうまくできればいいなと思っている。(豊田森林組合)

- ありがとうございます。基本的には、10時集合で16時か16時半解散という流れで集合場所はどこにするか、そこでお話を伺うその場所の手配と、お話をしていただける方を決めなければいけないと思う。(蔵治)
- 豊田の新しい動きとして、千年持続学校やスローライフなど先進事例をやっている。木の関係で森林組合の団地化だけではなく、木の駅プロジェクトが旭で動き始めている。(丹羽)
- そっち系のお話をしようと思うと、誰を呼ぶか、どこでやるかというのがガラッと変わる。豊田は結構広いので、皆さんご存知のように。(原田)
- 月1回集まっている千年持続委員会という会で、継続的にこの懇談会を紹介していて、日程さえ合えば必ず協力は得られると思う。(須崎)
- あと3週間しかないので、今の内容は最初12月にお考えだという説明だったが、今日のこの雰囲気そのまま継いでいくという形では、たぶん逆にした方がいいという提案なわけである。(蔵治)
- 一巡目というのは根羽でも岡崎でもここでもそうだが、一応概観する。地元から材料をとりあえず提供してもらっている。豊田なら豊田、岡崎なら岡崎、ある意味洗いざらい、こんなものがあるんだということによい。豊田は材料が多そうだから、その分だけ浅くなるのかもしれない。豊田から出てくるものは、資料がある。配布資料としては、相当ありそうなので補えるかな。(黒田)
- 2部制にして、第1部で森林行政と森林組合の取組みのことに分けて、2部で民間から発している、いろんな動きを紹介してもらおうというのも、それは別に市の人でなくても構わない。(須崎)
- そうするとあと動きとして、今話ができる「すげの里」を入れようと思うと、旭中心でセットしないといけないので、工程もそんなことになるかと思う。(原田)
- すげの里と旭の木ノ駅など山の現場は、距離的にもそんなに遠くない。(丹羽)
- 団地の動きも絡めればできないことはない。(原田)
- 2部はもう須崎さんが全部取り仕切る、任せてしまえばいい。でも、すげの里が7月7日空いているかというのが問題ではないか。(蔵治)
- それはすぐに確認する。(須崎)
- 皆さん、何か意見あるか。ここにいる人の総意で決めればいいことだが、特になければ、あとは具体的な実務的なことを須崎さんも含め、幹事みたいなメンバーに一任してもらえばと思う。今日みんな揃っているので、これが準備会ということで、大筋はこれで決まったので、細かい所は計画立てていただくということで。皆さん予定も詰んでいくので、集合場所と時間と、お昼どうという辺りだけは、早めに先にお願ひする。(蔵治)
- もう1つ確認は、本当に今日の話はいろんな人に聞いてほしかったという思いがあって、今回は拡大的に声をかけた。次回もそれはいいか。いろんなものがより合わさってきているので、多くの人に場所さえあれば、一緒に聞いてほしい話がいっぱいあった。恵那市にも岡崎市にも聞かせてあげたかったので、広げたいと思う。(丹羽)
- いいですよ。扶桑館とすげの里と。扶桑館がダメだったら、すげの里いきなり集合という手もなくはない。駐車場あるから、今日くらいの人数なら。(須崎)

- もう日は決まっているので、時間と、問題はどこで集合か分かれば、それで投げてしまっておいて、詳細はまたお知らせさせていただく。(溝口)
- ご苦労さまでした。今日 1 日午後も含めて、すごい体の震えるような思いで、業界の話を久しぶりに聞かせていただいた。次回は7月7日またより拡大して、人を増やすというよりも聞いてほしいなという思いで、つなげていければいいなと思う。今日は設営にあたって、両大島さん、恵南森林組合の小林、三宅さんに、お世話になった。本当にご苦労さまでした。(丹羽)

